

人間 雨森信成 (二)

山下 英 一

三、知られざる人、雨森信成

ところで雨森信成についてこれまでに語られているのに二つの側があった。その一つはハーン研究者からのもので、まず「小泉八雲乃横顔」(一九三四年、北星堂)の著者、高田力氏は「雨森氏に就いては、ヘルン著「心へ」と題して此の人に捧げられてゐる以外、現今殆ど世の知られてゐないのは遺憾なことである。今一般読者のために筆者の知り得たところを左に記してみよう。邦訳小泉八雲全集別冊「小泉八雲」に於て著者田部隆次氏は「雨森信成は米国で学問して、英仏独の各国語に精通し、和漢の学問にも仏教にも精しか

ったので、何でも知らぬ事のない不思議な人とヘルンに見られていた。……以下略」と書いている。これよりずっと年代がくだつて、平川祐弘氏が一九七四年(昭四九)の論文(講座比較文学六 東西文明圏と文学 東京大学出版会)でもこう書いている。「森亮教授の「ラフカディオ・ハーンと日本の心」は私の知る最高のハーン論であるが、この一文を読んだ私は雨森信成という人物をいよいよ知りたくなり、国会図書館で *Atlantic Monthly* の一九〇五年、五一〇―五二五ページ掲載の *Lalucadio Hearn, the Man by Nobushige Amenomori* を読み、そのすばらしい英文に驚倒した。本講座の読者で雨森信成についてなにか御存知の方は是非御一報くださるようこの紙面を借りてお願いする次第である。」

もう一つは雨森が学んだ東京一致神学校、後の明治学院大学の側からのもので、一、工藤英一氏は「東京一致神学校開校当時の人びと」(明治学院百年史資料集 一九七五年)で雨森についてまとまつた資料は未見だとし、次の資料を記しているのみである。「明治七、八年の頃なるべし、英国浸礼教会の医

家、宣教師パーム氏新潟にあり。当時氏は雨森某氏を助手として伝道したりしが、僧侶の教唆によりて一夜壮士等会堂に乱入し、雨森氏を殴打せり。僧侶の教唆によりしことは、後同県の禅僧にして後信者なりし、横井元峰氏の証言による。雨森氏は横浜に帰りしが、パーム氏は代りて働くべき助手を求め、之をバラ氏に謀れり。(三浦徹稿「耻か記」より) 二、雨森は越前福井藩士で元新潟の英学校に居たのを、その教師ワイコッフ氏が特にブラオン塾に送つて将来伝道者たらしめんと欲したのであつた。曩に私がブラオン博士の学僕をして居た時、雨森は新潟から出て来てブラオン先生の所で暫時世話に成つて居たが、彼も暫時は我等と共に上京して神学校に入學したが、恐らく彼は最初から伝道界に身を投ずる覚悟は無かつたと見え半途にして退學した。思えば、彼は非常な才子で頭脳も明晰で、横浜に居る頃からジョン・スチュワルト・ミルの「帰納法論理学」やハミルトンの「形而上学」やスペルセン「原理論」等を愛読し、往くとして可ならざるは無しという風であつたが、その多才多能が反つて身の敵と成つ

たが、種々の事業を計画し、例えば岡山県児島の埋立てやら、鹿児島県の山林採伐やら、その他種々の事業に関係したようであるが、就れも成功を見ずに比較的若死した。(井深梶之助とその時代「第一卷 一九七〇年」三、雨森君は、ウエプスターの大辞書を、初めから残らず読んだと云ふ程英語には熱心であつたが、失恋の爲遂に身を誤まつた。(田村直臣「信仰 五十年史」一九二四年) また「明治学院百年史」(一九七八年)によると雨森信成のようにすぐれた語学力や学識を囑望されながら、かえつてその多才、多能のゆゑに各種事業を計画して失敗し、キリスト教徒から不評をかつて信仰そのものから離れた。これら二つの側面からの雨森評は立場によつてこんなにも違うものかと興味があるが、共通していることは雨森のとくに英語の才能のことである。それもハーン側では賞賛を受け、明治学院からはその才能ゆゑに不評を受ける始末になつた。これでは雨森とは一体何者かとならざるを得ないだろう。しかもこの両側の資料は互に知られずに来たという事実もある。

ところが前記のグリフィス宛の二通の手紙の書かれた一九〇四年(明治三七)にすでにグリフィスが簡潔にして適確な雨森評をしていた。一九〇〇年に手紙といつしよに送つた



雨森信成(ラトガース大学図書館所蔵)

雨森自身の写真の裏にグリフィスがペンで次のような言葉を記していたのである。(アラフカデイオ・ハーンの親友、通訳者、協力者、伝記作者。ハーンは著書の一冊を雨森に献じ、An Oriental Conservative の章で雨森のことを書く。雨森は欧州の旅から帰国した時、行く前にくらべて極端に日本的になつていた。一八七一年、W・E・グリフィスの福井の生徒で、最初は西洋文明をがぶ飲みし、かつそ

れを捨てた。日露戦争中『The Atlantic Monthly』へ注目すべき寄稿がある。(ラトガース大学アレキサンダー図書館グリフィス・コレクション所蔵)

四、ハーン、雨森、グリフィス

An Oriental Conservative 正しくはA Conservative であるが、ハーンの著書「心 KOKORO-Hints and Echoes of Japanese Inner Life」(一八九六年)第一〇章のエッセーである。グリフィスはもちろんこれを読んで、雨森への手紙でそれに言及していた。森亮氏が「この小説風の『或る保守主義者』のモデルは、これもその中に入っている『心』が献呈されている雨森信成だろう。(中略)モデルの雨森の思想をそのままハーンが代弁していると考えるのはすし危険である。実証的判断を下す材料に乏しい。」(ラファディオ・ハーンと日本の心、一九七四年)との懸念は雨森自身の証言により氷解された。

こうしてA Conservative のあらずじを追ってみたい。〈仏教信仰を教えられて純朴

に成長した地方のサムライの子は黒船の脅威にあつて神通力の無駄なことを知った。英国人から英語を習っていたが、廃藩置県のため横浜に出て外国人宣教師を知りクリスチャンになる。しかしそのために勘当され、旧友に軽蔑され、身分を剥奪され、貧困になる。西洋文明の秀れた軍事力が西洋道徳と関係があるなら、キリスト教に従い国全体の改善に努力するのが明らかに義務であると思う。しかし西洋の慣習がそのまま東洋のものにはなれないことから数年後、公然とキリスト教を棄てて、キリスト教の西洋道徳への影響を見るためにヨーロッパへ exile (脱出)して行く。

どこにも完全な相互理解は決してあり得ないどころか、ヨーロッパの都市には権力、矛盾、偽善が、西洋文明の知識万能の裏には感情的理想の死があつた。計算されたメカニズム、功利主義の安定、因習、強欲、盲目的残忍性、高い偽善、欲求不足、富の横柄などこれらの西洋文明の特質に対し、善意と義務、幸福の理解、道徳的野心、信仰、楽しい勇氣、簡素、非利己主義、分別、冷静、節酒、満足が日本文明の特質であると判断した。そこで日本が

習得すべき必要なことは外国の科学と日本の敵とみなす物質文明から多くのものを採用することであるが、しかしそのために日本の善意の思想、義務と名譽の思想を投げ出すようなことがあつてはならない。昔からの生活のなかで最良のものを保持することなど外国文明を体験することによつて日本の価値と美しさを理解することを教えられて帰国した。

このように書いてしまつとエッセーとも評論ともつかない滋味のないものに思われるが、西洋文明をその模倣でなくもつぱら日本文明の強化のためと考へた愛国主義者(『保守主義者』を表面に出して書くところなつてしまふ。しかしこの書の出版された一八九六年頃はすでに外国人教師万能主義の時代は過ぎていた。もちろんハーンの文章はこの頃、知りあうようになった雨森の文明思想に大いに啓発された。雨森信成の英文によるハーン追悼文の訳によると「どうか御喜び下さい。私は日本に関する新著を半ば仕上げてしまいました。それは『東の国から』と同じ位の大きくなるでしょう。あなたに申し上げねばならぬのは、代表的日本の思想家としてのあなたの

率直なる激励のお言葉が主として私に刺戟を与へてくれたといふことです。御手紙が届く前はこれといって何も出来ませんでした。ヘールのやうな眼識と文才を持った人が、彼の著作に対する私の賛辞がその執筆続行の主な刺戟となった、と言ふやうなことは皮肉でないとしても全く没常識のことに思はれるかも知れない。(高田 力訳「小泉八雲乃横顔」言うまでもなく文中の新著とは「詩人、学者、そして愛国者なる我が友人、雨森信成へ」捧げられた「心 KOKORO」であった。しかもヘールが *A Conservative* の一篇を書きあげたのに二年近くも要したと雨森自身が知っているというのだから力作であろう。今日、この一篇は重要な論文とも名篇とも謳われているのも故なしとしないが、文章の美しさはさすがに名品と呼ぶに価するもので、とくに外国への *exile* から日本へ帰ってくる主人公の疲れ切った心をなぐさめ、高揚させてくれたのは船から仰ぎ見る朝焼け富士であったがこのような象徴性と美意識の融合は他に類を見ないだろう。

グリフィスはこの作品を読んでとっさに主

人公のモデルが雨森信成ではないかと思つて雨森には思いもかけない便りを出すことになつたのだろう。多少考えすぎかも知れないが、主人公は英人英語教師ルセーよりも米人理化学教師グリフィスの感化が大きかったと想像されるが、ヘールはなぜそのことに全くふれてないのか。グリフィスの疑問もそこにあつたのではないだろうか。雨森の宣教師ブラウンとの出会いもグリフィスと無関係ではない。たしかにエピソードとしてはクリスチャンで熱心な教師グリフィスよりも、生徒にからかわれたり、好かれたりするルセー先生が最初に彼等の知る外国人としてはおもしろからう。ヘールより二十年前に日本に来てその変革の渦中に身を置くことになつたグリフィスはヘールの日本について書くものになつた反響があつたと思われる。例えばグリフィスの *The Japanese Nation in Evolution* 「進化のなかの日本国民」(一九〇七)にこうある。へ出費の規制、節約、宗教などの統一はまず刀によつて確保された。その結果は封建時代に住んだ私に明白だったし、故ラフカディオ・ハーンの「日本、一つの解明」にも力強く書かれてゐる。しかしヘールは主に伝聞と書物から書いたが、私は日本の封建社会の生死のさまざまな局面で今では永久に消え去つた封建社会をありのままに見てきた。と書き、ヘールのこの最後の著書について他のヘールの作品と極端に違つて、巧妙であるが恐ろしい暴露作品であり、日本の家族の進化についても道徳の正しい実体もつかまずにその進歩を邪魔したり、戦争や機械のうわべだけの見せかけをしていると批判する。日本の進歩の中心に *Democracy* (民主制) を置いて考えているグリフィスにとつてヘールの *conservatism* (保守主義) は進歩に逆流する考えであると思つた。くわしくは後日の研究に譲りたい。

小泉一雄著「父小泉八雲」(一九五〇年)によると、ヘールが後年聊か雨森氏と疎遠になつた。と云うが、その原因を雨森がへ餘りにも豪放的な人物で、ヘールへ提供した材料をうっかり公表した等の点もあつたかと思つている。と述べている。しかし同書の雨森の言い分によるとへ併し、私はヘール君の性格をよく知っているが故に、彼からの手紙は他の人の場合は知らず、私の場合は一却つ

て公表せぬ方がハーン君の靈を慰めると信ずる。(中略)私は嘗てハーン君のリテラリ・アシスタントであつたし、両者間のコレスボンデンスの大部分は氏の著作の内容及材料の出所等に関する物である。それは公表せざる事をハーン君に望まれたのであつた。ハーンの対人関係について桶谷秀昭氏が「文明開化と日本的想像」(一九八七年)で興味ある見方をしている。ハーンとの対人関係はながつづきしなかつたのがその特徴で、それは熱烈な愛情や友情ではじまり、或るときまったく不可解な理由で冷たい、よそよそしいものになつた。ハーンはさうしてつぎつぎに友人を得ては捨てていった。いはば背信と裏切の常習犯であるが、注意すべきはハーンは疎遠になつたかつての友人の悪口をいはなかつたことである。

A *Conservative* をめぐつて雨森信成、ハーン、グリフィスの三者をそれぞれの思想を中心に結んでみたが、ハーンとグリフィスについては興味ある対照なので今後はもっと研究をしなければいけない。それにしても雨森の立場は他の二者の中央にあつて新しい文明

の何たるかを身をもって示した人物なので、次に雨森の著作について述べてみたい。

五、愛国者、雨森信成

グリフィスの手紙(一九〇五年)で雨森が危惧したとおり、*War and the Japanese Women* の原稿はグリフィスへ転送されていた。そしてどこへも発表される機会もなく今日までグリフィス・コレクションに眠つたままであつた。その辺の事情については知る由もないが、多分雨森の死によつて出版社またはグリフィスが発表を控えて断念したのかも知れない。原稿は美しく整然と書かれてあり、五〇頁から成っている。

そこでまずこの論文について内容を紹介することから始めるが、読者への便宜上、内容から見た区分をお許し願いたい。

a 出征兵士を駅に見送る家族

駅には少尉の母、若い妻、娘、息子や村人が見送る。父は西南戦争で政府軍の兵士として戦死。息子は四歳だが、後継ぎができたので安心して戦場へ行ける。亡き夫のために手柄をたててほしいと母は祈る。そして自分と

同じ経験が息子の嫁に繰り返されるのを見てよろこぶ。母の息子への希望は勝つて戻るか、愛国者として死んで帰るか、むしろ後者の方を良しとした。妻は口には出さないが、夫が戦死してもその子をその父にふさわしい子に育てると暗示する。軍務から気が逸れるといかないから、戦地から手紙を書くなど言う。妻は涙を押えて笑顔で夫を送るのである。

b 日本は昔から軍国

夫と共に戦つて苦難と栄光を分かちあう妻、朝鮮征伐の神后は軍団を率いて野営を守り、夫や兵士をなぐさめ励まし、時には軍事会議に参加した。王政復古の内戦で会津のサムライの妻や娘は官軍の攻撃に勇敢に行動した。軍需品補給の任務を志願した妻が夫の戦死を知らされ、形見の短刀をあずかつた時、夫はサムライにふさわしく立派に死んだかと問い、敵から身を守り切れず、捕われの恥を避けるために夫の形見の短刀で自害した。また大阪城の若大将の妻は、夫の妻への愛のために主君への忠誠がおろそかになり戦場で生き残りたい誘惑にかられるのを恐れるあまり、夫への感謝と主君に亡恩のないよう遺言を残して

自殺した。また四十七士の一人は七十五歳の母に一目会わんと帰ったが、母は目前の仕事に誠心をつくせと言ひ残して短剣でのどを切り自殺した。

c. 外国人作家の見た日本女性

ハーンは非常に注意深い作家だが、悲しいことに日本の女を美しく優しい奴隷と見ることは例外でない。彼は日本女性の特質として親切、御し易さ、同情心、優しさ、上品さをあげ、さらに他人の喜ぶことをするその佛のような理想は西洋人のたどりつかない理想の実現された姿であるという。しかしハーン

のこの考えに与するのはこわい。ハーンはまた道徳上、日本の女は男と人種が違うようだとともいうが、日本の女は人間であつたし、今も人間に変わりはなく、天使でも奴隷でもない。どうもほとんどの外国人作家の見方は女大学のような従順な女に片よつてゐる。

d. 聖書に見る女性の謙虚

聖書のなかの女性には日本の女性と同じへりくだりな姿がある。しかしへりくだりは服従ではない。また新約聖書では奴隷（これについて注に *slaves* という言葉に奴隷とか召使の鞭よりこわく、兄の鉄拳に敢然と立ち向う

e. 男女の社会的に公正な立場

家康は主君は家臣を主人と思えと言つてゐるが、これと似た関係が男女間にも在つて、女は男と同じく、尊重されるべきだ。生来の鋭い観察力の持主、ハーンもこの事実を直観して、社会から女を守らねばならない。昔の日本の社会はそうであつたと述べてゐる。男

が家族の外的義務を負い、女は内的必要を満たすべきだ。慎みのある娘、思慮深い妻、注意深い母になるのは社会で目立つよりはるかに称賛に価す。また家庭を楽しく夫を悪い行為から改心させ、子供を正しくしつける不慮の心づかいを持つ女が、男のなかで目立つ女よりも立派だと思われた。

f. 武士階級が代表する日本の女性

一方、姉妹の涙の原因をつくることに心配したという。これらの女の特長はその莊嚴と崇高な魂にあつた。それは一旦緩急あれば権利を主張した。見た目には美しいが、そのなかにはひと目で身ぶるいするような錦の袋に包まれた懐剣のようなものがあつた。長い間政権を握つてきた武士階級の女性を他の階級の女が真似る。そのように、日本女性のバックボーンを形成したのは武士の女性の精神だつた。男に高遠な野心、大胆な勇氣、強く静かな情熱を注入し、氣骨ある兵士を生んだのは尊敬されるべき女性によつてであつた。

g. 愛国心と平和主義

もし兵士の勇氣と愛国心が賛美されるなら、それを生んだ女性が賛美されて当然。世界は満州で戦つてゐる日本の兵士を賛美してゐるが、その賛美は家を守る女性も分かちあうべきだ。この国民性は変らずにこれからも続く。もちろん古いタイプは完全でない。弱点は強化されてしかるべきだし、悪いことは外国の要素との同化によつて改良されてしかるべきである。けれどもこのタイプ自体は本質的に不変のままであらう。今の戦いで日本はかな

りの力をつけているが、少くとも生産の道具が破壊の道具にとって代わる時の来るまで、また国々が平和交流から平等の利益を引き出して、戦争が世界の人の心から未知なものとなってしまう時の来るまでこの古いタイプを続けよう。

六、雨森信成の日本精神

佐々木高行ら欧化主義に対抗する人たちの設立した明治会の機関雑誌「明治会叢誌四〇、四一号(明治二五、二六年)に「学弊」という雨森の論文がある。「学弊」とは学問の弊害の意味で、雨森は世に行われる和学、漢学、洋学の有害な面を説いて「学問の如きは己れが材を働かする器具となすべきのみ。畢竟するに学問を奴隷としてこそ使役せよ、之を主人として自ら使役せらるゝこと勿れ」と警告する。学問のための学問を雨森は嫌った。まず和学を「姑息柔弱」なりとし、源語の講釈のごときは生存競争の世を活歩できない。次に漢学を「過当思想」と述べて物心ともに過大視する漢人の害に慣れることをいましめる。そして洋学は西より渡来した「軽奔自棄」だとし

て崇め真似ることの弊害の大きいことをきとす。〈富国強兵の実を挙げて我国体を其儘にして発揚し以て異国人の尊敬を博してこそ真の国権拡張とも云ふべきなれ〉と論じた。

雨森のいう愛国とは文字通り身を賭しての自国の愛護であり、それがやがて国体の発揚、国権拡張の思想へと発展すると見た。War and the Japanese Women に先立つ一九〇四年、アトランティック・マンズリに発表されて、グリフィスが心のこもった賛辞を雨森に送った The Japanese Spirit にも愛国思想が十分に感じとれる。まず「なぜ日本人はかくも勇敢なのか」との海外からの声に対して、それは日本人の国家への愛国心、忠誠心であると雨森は答えている。その愛国主義(The Japanese patriotism)の特徴は、日本人が「我国」と呼ぶ概念は天皇及び皇室を意味すると説明する。戦争に於て最高の名譽は勝つか死ぬかの決意から、義務に準じて死ぬことであった。この義務こそが War and the Japanese Women で雨森が主張した日本女性

え忍び、しかも冷静なのは最後まで戦う断固とした決意あればこそである」と。

これらの論文の目的は戦時下の日本人の精神の発揚のよってきたる所をアメリカ人に説明することであり、その裏側には西洋追従への否定があつたに違いない。すでに日清日露で日本を強国にした理想を広く鼓吹しようとするナショナルリストイックな意図もあつた。その目的のために雨森は日本及び日本人の立場をその国民性や伝統をふまえ、かつ西洋文化の知識をひきあいに出して相手に分らせようとする努力と外国語の実力をあわせ持っていた。しかもその論点は一方的または一面的でなく、つねに対立的であり、それは雨森自身の教養やいくつもの信念の対立によるせいであろう。対立、矛盾を内蔵し、精神的葛藤を繰り返しつつ前進してきた雨森の変遷はやがて統一へのエネルギーとなつた。変わらずして変るといふなかでの止揚を孕みつついわずば syncretism (諸説混淆) → union, harmony, reconciliation (統一、調和、和解) → peace (平和) のような図式へと発展していくことを願つた点ではキリスト教文明観の理想主義

のグリフィスと武士道的文明観の現実主義の
雨森の違いは見られても、あの二人の往復書
簡で雨森が述べた東洋と西洋の一致に至る道
と不完全な人間への哲学的考察はともに在野
の思想家として生きた両者にとって重要な意
味を持っていたといわねばならない。

それにしても十五歳で福井を離れた雨森が
三十年ぶりに訪れた福井をどう思ったであろ
うか。筆者の雨森信成への思いはまだ尽きな
い。

付記

雨森信成については次のような論文がある。

松村じゅん

「保守主義者」と雨森信成（「へるん」第

二二二号 昭和六十年 八雲会）

池辺 栗

ハーン先生と大伯父雨森信成との絆（「

へるん」第二四号 昭和六十二年 八雲会）

山下英一

「心」の保守主義者 雨森信成（「英学

史研究」第一九号 昭和六十一年 日本英

学史学会）

雨森信成の未刊論文「War and the Japa-
nese Women」（「英学史研究」第

二〇号 昭和六十二年 日本英学史学会）

平川祐弘

日本回帰の軌跡―埋もれた思想家 雨森

信成―（「新潮」四月号 昭和六十一年

新潮社）（後に平川祐弘著「破られた友

情 ハーンとチェンバレンの日本理解」

昭和六十二年新潮社に収録された。）